

立教大学校友会報

http://www.rikkyo.ac.jp/koyu/



セントポール ST. PAUL'S ALUMNI



発行所 立教大学校友会 〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1 電話 03(3985)2634 発行人 江草 忠敬 編集人 石崎 孟

主なニュース

- 2面 新赤レンガ募金終了のご報告
5面 周年の集い開催される
6~7面 特集 留学生座談会
12面 「地域立教会を訪ねて」宮城立教会



時計台

2009年 新春特別総長インタビュー

2008年、立教大学は異文化コミュニケーション学部、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科を開設、さらには立教セカンドステージ大学を開校いたしました。今号では大橋英五総長に進化を続ける立教大学についてインタビューいたしました。

新年おめでとうございます。総長は2006年6月に就任されましたが、これまでを振り返って、大学の環境はどのように変化しましたか。

現在、大学は厳しい環境にあるといわれておりますが、大学間競争は終盤にきています。考えております。学生が集まる学校というのは、現在社会が大学に要請している研究・教育の中心を理解し提供している大学です。立教大学は10年ほど前から教学改革に取り組みしてきました。この成果は今後、もつとほつきり効果が出て、社会に発信できると確信しています。

立教大学はここ10年間で5学部から10学部になりました。しかし、ただ学部を増やしたのではなく、今までは研究領域を進展させて再構築して発展させた形なのです。例えば、社会学部から観光学部が、そして経営学部が生まれたのです。これも時代の変化に対応したか

また、学生の資質がずいぶん変わってきました。昔は家族の人数も多く、兄弟や近所のガキ大将との喧嘩で社会との関係を学んだことも多かったのですが、今の家庭環境は必ずしもそうともいえないですね。すると、社会との付き合い方の訓練が少ないうえに、セミナーで本気になって議論しない、反対議論を言うて険悪な空気になるのを恐れる、という風潮が出てきます。自分の意見を言える学生を育てる、そのためにも今後、少人数教育を行なう予定でおります。

2009年度の課題としては、まず一つは国際化です。ただ外国語が分かる、話せるだけでは国際化とは言えません。社会が広がれば広がるほど、自分はどういうところで育ってきたのか、どういう文化を背負っているか、どういう考えを持っているかを自ら発信する人が求められると思います。そのような人材の



▲総長室にてインタビュー

育成を目指しています。また、「英語の立教」を再構築するため、言語教育科目を大きく改革します。現在は1年次に集中的に英語教育を行なっていますが、専門教育における外国語教育と連動させる形で4年間を通した言語教育科目体系を作ります。同時に1年次

の英語必修では、デイスカッションは1クラス8人規模、ライティングとプレゼンテーションは20人規模へと、さらなる少人数制を進めます。また、外国語の「副専攻」を設定する予定で、各学部とも専門教育における外国語系のプログラムの見直しを行なっています。更に、大学

環境に直面してきました。しかし今までの大きく違う部分があります。これまでは「厳しい環境」であつても学生は増える一方でした。今後は学生の数が減る、そういう時代に直面しているのです。言うまでもなく、立教はキリスト教の大学です。創立13

院の一層の充実などの、新しい社会の要請にこたえる課題を持っています。それから、大学という場所では「共生」という考え方が大切でして、その大前提としていろいろな方が集まる必要があるのです。異なる考え方を持つ人、様々な経験をした人、様々な年齢の人、セカンドステージ大学の開校もその一つの形でもあります。それぞれが自由に議論できる環境が大事であると考えています。

自分学びたいものと出合った学生にはすごいパワーを感じます。それは、とても幸せなことだし、セカンドステージで入学してくる50歳代の人にも言えます。隣りの人と比べても何にもなりません。「自分の人生」を生きて欲しいと思います。それが社会の中でどのような役割



▲右のハガキを組み立てると左の作品に

作の発想は飛行機の中のこと。一生をかける学問と出会い、友人にも恵まれた学生時代を過ごされたことが、豊かな発想を生む源かなと思います。 会報委員 町田 香子(55歳)



▼「今の立教があるのは先輩方のおかげ」と語る総長

を果たすのかを考えてほしいですね。私の好きな言葉で、「少しばかりの地位、財産、名誉、学問があるからといって、それを自慢してはいけません。神様の前ではみな小さなことです。あなたが社会の中で何ができるかを考えることが大切なことです。」という主旨のウイリアムズ主教の言葉があります。立教大学はそのような学生を育成したいし、育つてほしいですね。

5周年にあたり、建学の精神を今の社会に対してどのように発信できるかというのを再構築するのが大事と考えています。今年の4月にキリスト教学研究科ができるのもその一つです。キリスト教についての考え方、精神を継承しながら、もつと建学の精神について理解を強固なものにしようという取り組みがあります。 今の立教生にメッセージをお願いします。

池袋という街は不思議な所だ。異質のものをすべて包みこむ寛容さと、それらが独自の色に染め込まれて日常の隅々まで溢れ出ている。池袋は今年社会人2年生の、会社の後輩。待ち合わせの時間に大幅に遅れてきて、汗をふきふきそんなことを言った。 「そんなことはないよ。ちよつとむつとした私に、後輩は不思議そうに首をかしげた。

この独特の雰囲気は馴染める店、馴染めない店があるのか、回転が速く、少し来ないだけで顔ぶれがガラリと変わってしまう。かと思えば、何年たっても同じ姿で迎えてくれる老舗が並んでいたりもする。このアンバランスさが、この街の魅力だとも思う。 立教生にとっては「共通語」となるような店も多い。「センとん」「3000B」「ABC」などなど、数え始めたらきりがなし。学生時代行きつめた店の話題は、卒業生同士、そして立教と卒業生との絆もつと暖めてくれる。 学生時代は大学にいる時間と同じくらい、もしかしたらより多く、この街で過ごした。この街に刺激され、ときに慰められ、ときに現実を知り、そこで繰り返される人間模様。少しだけ人生を学んだりもした。多くの立教生がおそらくそうであるように、社会と自分との関係を意識し始めた端緒が、確かにこの街にある。

池袋はいい街だよ。ホントに。そうですか、と怪訝な顔でついてくる後輩に、あとで池袋の「目印」を教えてあげなくては。 (平川 容子 平15経)